近江の壺にはまる―壺・壷・ツボ・つぼ大集合－

はじめに

現在の日常生活で普通にある壺。器としての壺だけではなく、私たちは身近な言葉として壺という言葉を使っています。慣用句として「壺にはまる」や「〇〇のツボ」など日常で使われています。壺には別の「壷」という漢字があり、さらに「つぼ」、「ツボ」と場面によって使い分けられています。壺は器としての形だけではなく、言葉にも多様性があります。こうした壺が近江（滋賀県）では、いつ頃作られ始め、どのように使われ、どのような形に変化したのか、壺に焦点を当ててその歴史や造形を紹介していきます。

1. 近江の壺の始まり

浅鉢変容壺
（大津市穴太遺跡・縄文時代晩期）

深鉢変容壺
（近江八幡市後川遺跡・縄文時代晩期）

胴部がふくれて頸がありロがすぼまる壺は、縄文時代早期の終わり（約8,600年前）に鹿児島県で出現します。その後、縄文時代晩期（約3,200～2,500年前）には東日本地域で壺は認められますが、滋賀県を含めた近畿地方では煮炊きや貯蔵に使う今でいう鍋（深鉢）や盛り付けなどに使う浅い鉢（浅鉢）が使われ、壺は東日本から運ばれてくるもの以外ほとんど使われませんでした。縄文時代晩期後半（2,600～2,650年前）に近江の縄文人に強い衝撃が走りました。

西の方にコメ（米）という食べ物と壺という道具があるという情報が伝わりました。まだ、本格的な稲作農耕が伝わっていない近江では、コメも稲作農耕に伴う貯蔵用の壺も貴重なもので、壺が登場した時、どこの集落でも持っている道具ではありませんでした。

実際に壺を見たり、情報が入ってくるにつれて、近江の縄文人は、自分たちの道具である深鉢や浅鉢の口の部分を絞って壺を作りました。しかし、形は壺に近いものから鉢と壺の中間的な形などいろいろな形があります。現代の研究者は、元々ある道具の形を変形して壺にしていることから深鉢の口をすぼめて作った壺を「深鉢変容壺」、浅鉢の口をすぼめて作った壺を「浅鉢変容壺」と呼びます。西から伝わった壺、深鉢変容壺、浅鉢変容壺が近江における壺の始まりといえます。

2. 壺を彩る

木葉文で飾られる壺
（守山市赤野井浜遺跡・弥生時代前期）

赤と黒の顔料で飾られる壺
（守山市小津浜遺跡・弥生時代前期）

弥生時代には稲作農耕と共に貯蔵用で火にかけない壺と火にかけて煮炊きを行う甕の２種類の土器が基本の道具となります。初期の壺や甕にはヘラや櫛状工具でまっすぐに線を何条も描く直線文や波の形のような波状文で飾られます。しかし、壺にしか使われない文様もあります。あたかも水が流れ落ちる様子を表現したような曲線が美しい流水文、木の葉を描いたような木葉文などが代表として挙げられます。さらに赤や黒の顔料などで文様が描かれた芸術作品のようなきれいな壺もあります。

煮炊きに使われる甕に比べて装飾性が豊かで、彩られるのが壺の特徴であるいえます。

３. 壺の大きさの大小

弥生時代前期（約 2,500 年前～約 2,400 年前）になると壺がどの集落でも日常的にに使われるようになります。弥生時代前期～中期には、さまざま大きさの土器が作られます。最も大きいものは高さ 80cm 程にも及び、最も小さいものは高さ 5cm 程度のものまであります。

弥生土器の小型壺とミニチュア壺（弥生時代前・中期）
（守山市赤野井浜遺跡・小津浜遺跡）

多くは高さ 20 ～ 30cm で、このくらいの大きさの壺が最も日常で使われていたようです。高さ 10cm 前後の小型壺やさら小さなミニチュア壺もあります。

古墳時代になると小型丸底壺と呼ばれるまつりに使われる壺が作られるようになります。この壺のほか、さらに小型の壺や手づくねで作られたミニチュア壺なども作られます。こうした土器が水辺からまとまって出土しすることもあり、「水辺のまつり」に使われと考えられる例もあります。

水辺のまつりに使われたミニチュア土器の出土状況
（東近江市堂田遺跡　古墳時代中期）

水辺のまつりに使われ土器
（東近江市堂田遺跡　古墳時代中期）

弥生時代のミニチュア壺は、現代に例えるとお猪口ぐらいの大きさなので、実用品とは考えにくく、古墳時代の例から祭祀などに使われたと考えられています。しかしながら、弥生時代のミニチュア壺は実際の出土状況から祭祀に使われた証拠は得られていません。古墳時代に比べて出土数が少なく、作りも丁寧で実用品そっくりに作られているので、こどもに与えた現在のおもちゃのようなもの、あるいはこどもが親と一緒に作ったものかもしれません。

４. 壺の歴史と変遷

縄文時代晩期後半に出現した壺は、弥生時代になると日常の主要な道具となります。壺の形も口が広く開いた壺（広口壺）が基本となり、その後、頸が細く絞まった壺（細頸壺）や頸の短い壺（短頸壺）、頸の長い壺（長頸壺）、頸のない壺（無頸壺）など種類を増やして行きます。本来、壺とは口のすぼまった形の器を指す言葉なので、頸のない無頸壺は壺とは呼べません。壺は形とともに煮炊きに使う甕と対比して貯蔵用という用途が加味されて、頸がなくても、用途が貯蔵用と考えられることから壺と呼ばれるに至ったと考えられます。

弥生土器の組み合わせ
（右・中央奥は壺、中央・左奥は甕、手前は鉢　守山市小津浜遺跡 弥生時代前期）

弥生時代前期から中期の始め頃には壺・甕には土製の蓋が作られます。壺の蓋には2ヶ所に2孔1対の孔が穿たれ、それに対応するように壺にも2ヶ所に2孔1対の孔が穿たれています。その後、弥生時代の中頃には蓋は木製などに変わり、壺の孔もなくなります。蓋がなくなる頃には、壺の種類も増え、多様な文様で飾られるようになります。一方、壺の種類が増えると共に甕と同じようにあまり飾らない壺など多種多様な形の壺が作られます。こうして種類をふやした壺も弥生時代の終り頃になると超大型の壺などは作られないようになり、小型化し、徐々に飾られなくなります。

弥生土器壺蓋（弥生時代前期）
（守山市小津浜遺跡）

古墳時代に入ると弥生土器の伝統を受け継ぐ、素焼きの土師器は煮炊きに使う甕が球形化し、頸がすまり、壺に形が近づいてきます。弥生時代の初めには形や用途で明確に区別されていたものが、徐々に曖昧になってきます。壺は形よりは、煮炊きに使ったか使ってないかという視点から区別されるようになります。5世紀（古墳時代中期）になると窯を用いて高温で土器を焼く技術が朝鮮半島から伝わり、従来の弥生土器や土師器より硬質で灰色の須恵器が登場します。一部の壺を除き、火にかけない壺はほとんどが須恵器で作られるようになります。

須恵器甕（古墳時代後期）
（甲良町北落古墳群）

しかし、口のすぼまった大きな液体を貯蔵する須恵器を壺とは呼ばず「甕」と呼びます。これは、現在の水瓶（甕）に近いイメージだと考えられます。このように土師器の甕に形が近く頸がすぼまって短い口がつく須恵器を甕と呼びます。「瓶（甕）」という言葉を広辞苑第7版では「液体を入れる底深の壺形の陶器」と説明されています。これは須恵器の甕の説明にはぴったりです。弥生時代には壺と甕が形および用途の上でも明確になっていたものが、古墳時代には境が不明瞭になります。さらに、古墳時代になると大型のものは少なくなり、甕に比べて直線的に長い頸がつくものを壺と呼ぶようになります。須恵器の中には壺の胴に初めから円孔があいた瑳と呼ばれる土器があります。この孔に竹管をはめ込み、注ぎ口として液体を注いだと考えられています。

須恵器瑳（古墳時代後期）
高島市高田館遺跡

須恵器の壺は飛鳥・奈良時代から平安時代にかけての古代にも引き継がれ、液体を入れる用途を基本により細かな用途に応じた形が作られます。また、鎌倉・室町時代には蔵骨器（骨壺）として火葬骨を収めるために使われる例も増えてきます。

写真で見る壺の変遷（左上から右下に向かって時代が新しくなる）

弥生土器壺（弥生時代前期）
（草津市烏丸崎遺跡）

弥生土器壺（弥生時代前期）
（草津市烏丸崎遺跡）

弥生土器壺（弥生時代後期）
（草津市柳遺跡）

弥生土器長頸壺（弥生時代後期）
（草津市中兵庫遺跡　）

須恵器壺　（古墳時代後期）
大津市穴太飼込古墳群

須恵器双耳壺（奈良時代）
大津市関津遺跡

須恵器壺（奈良時代）
大津市関津遺跡

信楽焼壺（室町時代）
大津市霊山遺跡

５.壺を使う・運ぶ・中を覗く・飾る

壺にはいろいろな痕跡が認められます。そうした痕跡の一つに細い板状の材を組み合わせた籠目跡があるものがあります。この籠目跡は弥生時代を通じて襷掛け状のものが多く、壺を覆っていたかごの跡が土器に転写されたものです。

民俗例では運びやすくするために、持ち手の付いたかごで壺を覆い、水汲みに用いられた例もあります。また、守山市下之郷遺跡では、つるを襷掛け状に巻き付けた壺が井戸から見つかり、水汲み用の釣瓶として使われ可能性も指摘されています。このように籠目付壺はいろいろな用途に使われたことが想定されます。こうした壺の中には煤けている場合もあることから、保管場所は家中の炉の付近に吊されていたのかもしれません。

籠目跡のある壺（草津市柳遺跡・弥生時代後期）

円窓付壺（守山市赤野井浜遺跡・弥生時代中期）

籠目付壺のように実際に使われた痕跡が当時の人々の生活の一端を明らかにしてくれることとは対照的に、これは何のために付けられたのか解明されないものもあります。その一つに円窓付壺があります。

円窓付壺はあたかも日本家屋の壁に円い窓が取り付けられているかのごとく、壺の側面に円や楕円の穴を開けた弥生土器です。なぜ円窓があるのかその用途はよくわかっていません。弥生時代の壺は水や穀物を入れるための貯蔵用の容器と考えられており、壺の側面に大き穴を開ければ、水や穀物がすぐ溢れ出てしまいます。こういった点から実用品というよりは祭祀に使用されたと考えられています。壺の中を覗けるような思想的な意味があったのかもしれません。

装飾付須恵器壺（古墳時代後期）
（近江八幡市岡山城遺跡第2号墳）

古墳時代になると滋賀県では数は多くありませんが、装飾付須恵器と呼ばれる壺などに小型壺、人物・動物などが付いた葬送や祭祀に用いられた飾られた須恵器があります。近江八幡市岡山城遺跡第２号墳からは須恵器の脚付装飾壺が出土しています。岡山城遺跡の装飾付壺は肩と底の部分のそれぞれ４ヶ所に簡略化された動物が飾られ、残りの良い装飾は肩の部分２ヶ所が猿と馬、底の部分が馬と鹿を表現したと考えられています。

底の装飾は壺を倒立させると正位置になることから壺の真中から上下が対称になるよう設計されています。

肩部装飾猿

肩部装飾馬

底部付近装飾鹿

埋もれた文化財の話 44　編集・発行　滋賀県埋蔵文化財センター
令和6年（2024年）3月
〒520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732－2
TEL:(077)548－9681　FAX:(077)548-9682
E-mail:shigamaibun-center@guitar.ocn.ne.jp
URL:https://www.shiga-mc.sakura.ne.jp/